パミールの南北における教育事情

――フンザとキルギス族の村の比較から――

辻　本　雅　史

1．はじめに

1993年８月、われわれパミール学術調査隊は、パキスタン国のフンザ、および中国新疆ウイグル自治区南西端のキルギス族の寒村スバシで、子どもの生活と教育事情を調査した。

この両地点は、次のいくつかの点で共通点がある。（１）パミール高原を南北にはさむ高所辺境地にあり、苛酷な自然のなかで経済的にはかなり貧困状態である。（２）民族的にはそれぞれの国における少数民族に属する。（３）宗教はともにイスラム教であるがそれぞれの国ではいずれも少数派に属している。キルギスはスンニ派だがイスラム自体が少数派、フンザはスンニ派に対する少数派シーア派のイスマイリー派。（４）両地点とも、パキスタンと中国最西端の町カシュガルとを結ぶかつてのシルクロード沿いにあり（ただしパミール越えの難所[1]）、ふるくから隊商路の通過点に位置している。そしてこのルートに1979年に自動車が走るカラコルム・ハイウエー（中国では中巴公路）が開通し、両地点は車でほとんど１日足らずの距離に位置する。このルートが1986年に一般に開放されてから、モータリーゼイションの波がおしよせ、交易と観光のための外来者の往来が頻繁になった。いずれももはや“秘境”とはいえない。

しかしこうした共通点にもかかわらず、今回の調査の結果、両地点の社会や教育の現状は、きわだった対照をみせていることがわかった。本小論は、今回明らかとなった両地点の教育事情のちがいを報告し、その要因について考察をこころみる。

2．フンザの概要

現在パキスタン国に属するいわゆるフンザには、かつて藩王支配のフンザ王国があった。1947年のパキスタン独立後、インドとの係争地であったフンザ王国は、ムスリムが圧倒的多数をしめることから、パキスタンへの帰属を選択し、パキスタン連邦政府の保護下にはいった。パキスタン政府はイギリス統治時代にならって王政を認めて間接統治を続けたが、1974年に平和のうちに王政が終結、現在「北方地域」(Nothern Areas) 行政区に属している。

フンザに対するパキスタン中央政府の関心はいまのところ高くないようにみえる。その理由として以下の点が想定できる。(1)長く続いた間接統治の伝統と気風がなお残っていること。(2)フンザの宗教は、パキスタンで圧倒的主流派のスンニ派ではなく、シーア派のうちでもさらに少数派のイスマイリー派(さらにニザール派のホジャ派系) であること。イスマイリー派の宗教的最高指導者はアガ・ハーンであるが、フンザ住民のロイヤリティは、パキスタン国よりアガ・ハーンに対する方がはるかに高い。(3) フンザは民族的・文化的にもきわめて少数派であること。なおフンザには、ワーヒー・タジク族 (アフガニスタンのワハンの谷から入ったタジク族)、ブルーショウ族、シナーキー族などが地域や村ごとに住み分かれており、それぞれ一定の文化的特性を保持している。(4) 苛酷な自然と交通の難渋な高所辺境地に位置し、生産力がきわめて低く、人口の過少な地域 (4～5万人) であること。1億以上の人口をかかえるパキスタン政府にとって、狭隘なフンザは最小の点でしかない存在であろう。

フンザ住民の居住区はインダス川の源流域、標高1500メートルから2500メートルまでの高地にあり、多くの氷河をともなったラカポシ (7788㍍)・ディラン (7273㍍)・シスパーレ (7610㍍) などの大変美しい高峰に囲まれている。極度の乾燥地のため、地表の大部分は乾ききったガレキと岩ばかりの斜面でおおわれている。フンザ川沿いの扇状地形のわずかの平地に点在する集落が、上方の氷河から用水路で導いた水をたよりに辛うじて農業と牧畜の生活を営んでいる。つまり氷河から引かれた小さな用水路が (水路沿にのみ草が生えているため) 一本の緑の線となって何キロにも延びるその先に、人が住んでいる。ここでは水の存在が人の生活を絶対的に規定している。

集落はポプラ・柳・アプリコット (あんず) などの植林がなされ (植林樹には

各々一定の用途がある)、畑にはじゃがいもや小麦・大麦などが栽培されている。牧畜はヤギ・ヒツジ・ウシの放牧だが、その規模はおおむね小さい。なお山の上方にのみ適度の降水量があり、植生の限界を越えた最上方との間のその部分にのみ帯状に森林がつづいているが、極度の傾斜地となっている。そこに夏用の牧草地があるというが、下方からはうかがうことはできない。

フンザは大きく3つの地区にわかれている。フンザ川下流にあたる南のギルギット周辺はインド語派ダルト語群シーナー語を話すシン人が、フンザ中心部（カリマバードおよびアリアバード）にはブルシャスキー語を話すブルーショー人が、そして上流部のゴジャールにはワーヒー語（イラン系）を話すワーヒー・タジク族の小さな村が散在している。調査は、人口のまばらな上流のゴジャール地区を中心にカリマバードの一部も含めておこなわれた。(以上、月原、1993)

3．フンザの学校の概要

パキスタンの学校制度では、初等学校（小学校）が5歳から10歳までの5年制、原則無償の義務教育である。1970年代に初等教育の国有化政策が進められたが、劣悪な教育状況のために、1980年代以降私立学校の増加が進み、主に中産階級子弟の需要に応えている(寺谷、1987)。義務教育であるはずの初等学校の就学率は、パキスタン全国平均で38パーセント（1989年現在、男子49%、女子27%）にすぎない（渋谷、1993)。

中等教育は3年の中学校と2年の高等学校である。就学率は1983年現在、中学校26パーセント（男子35%、女子14%)、高等学校16パーセント（男子21%、女子9%）である（渋谷、1990)。初等・中等教育（計10年）ののち、2年の中間カレッジと専攻種別によって就学年限の異なる大学がある。

パキスタン全国のこうした教育の平均的状況と較べれば、以下に示すように、フンザでの教育の水準と普及は、驚くべき進んだ状況を示してくる。

フンザには現在84の小学校もしくは併設中学校（ミドル・スクール、5年の小学校に3年の中学校を統合した学校）がある。それらは設置母体によって3種に分類できる。

（1）政府の設立になる5年制の公立小学校（government school）。これが35校ある。本来無償だが、実際には月額2～5ルピーの授業料を負担しているという。使用言語は国語のウルドゥー語。英語学習は本来中学校からであるが、早期から取組む私立学校の影響のため、公立でも近年とりいれつつあるという。保護者負担は低廉だが、教育の内容・水準・施設などは劣悪で、住民の支持は低い。

（2）アガ・ハーン財団のＡＫＥＳ（the Aga Khan Education Services）の設立になるアガ・ハーン学校が公立小学校と同数の35校ある。宗教立ともいうべきものだが、法律上は私立学校に分類されるものであろう。授業料は月額25ルピー、入学金1,000ルピー。使用言語はウルドゥー語（国語）で、民族語が補助的に口頭で使われる。おおむね生徒数100人以上の規模をもち、財団の援助により明るい洗練された校舎と設備を誇っている。村内ではモスクと並ぶ近代建築。住民の支持と評価はすこぶる高い。

（3）政府からもＡＫＥＳからも援助をうけない私立学校が14校ある。なかには旧王室の寄付による学校もあるが、多くはコミュニティ・ベースによる設立が一般的である。私立の自由さのためか、ウルドゥー語ではなく英語で教える学校が少なくない。授業料は比較的高額となり、通常月額100～150ルピー、英語で教える English scool は200ルピーであるという。

5つの学校を実際に訪問し、見学と聞き取りの調査を行った。内訳は私立3校（中央フンザ地区のアリアバード、カリマバード及びゴジャールのグルミット村）、アガ・ハーン校2校（ゴジャール地区のグルキン村、パス村）である。なお飛び込み調査でもいずれも歓迎された。その点訪問許可がほとんど得られなかった中国とは対照的であった。

結果的に学校調査は私立とアガ・ハーン校にとどまり、公立学校調査が欠けたのは不十分であった。現地ガイドは公立学校には案内しなかった。公立学校を見せたがらなかったのだが、そのこと自体、住民の公立学校への評価のあらわれとみてよい。アリアバードで夏休み中の公立学校を偶然のぞき見る機会を得たが、10前後の机を並べた小さな2教室のみの貧弱な施設であった。遊び場もはたして100坪あったかどうか。なおゴジャール地区のグルミット・グルキン・パスの村を歩き、子どもたちの生活状況の観察と聞き取り調査を行った。[2]

4．フンザの学校教育の特徴

調査によってえられたフンザの学校教育の特徴を示す。

第１に、義務教育就学率が非常に高い。アリアバードの私立ミドルスクールのアマン校長（フンザ私立学校連絡会会長）は約93～４パーセントの数字をあげたが、われわれの印象からしてもそれは誇張とは思われない。パキスタンの全国平均38パーセントに比し、その高さに驚く。なおパス村のアガ・ハーン校の校長は、就学率は100パーセント、非就学児童はいないと自慢したが、これが事実でないことは、同村で非就学児童に出会ったことから、間もなく判明した。とはいえ同校長の言が非就学児童の存在を恥じて隠そうとする意識の反映であるとすれば、男女を問わず学齢児童の就学を当然視する意識が一般的に存在していることを物語る。なお45年前のバルチット（今のアリアバード）では、小学校と上級学校が各１校あるものの「娘たちはどんな学校教育も受けていない」状態であった（アンヌ・フィリップ、1988、230頁）というが、いまやフンザではどの村においても女子の普通教育は常識化している。

第２に、教育経費が多くかかっても、私立およびアガ・ハーン学校へ通学させている。逆にいえば政府の公立学校は低調をきわめている。

第３に、フンザの子どもたちが学校教育を受けることは事実上異文化を学ぶことを意味している点に注意したい。学校での使用言語は国語のウルドゥー語（一部の私立で英語）である。ところが住民の生活言語は各民族によって異なる上に、相互に通用性がない。ゴジャールのワーヒー・タジク族はワーヒー語、中央フンザ地区のブルーショー族はブルーシャスキー語、ロウアー・フンザ地区に住むシナーキー族はシーナー語が使われている(月原、1993)。いずれも口語のみで、表記すべき固有の文字がない。したがって学校で使用されるウルドゥー語（国語）も大多数の児童には事実上の「外国語」にほかならない。かれらにとって学校教育をうけるということは、「国語」学習においてすら異文化を学ぶにひとしい。少なくとも学校教育のなかには、かれらの民族的・文化的アイデンティティを満たすものはない。逆に学校教育は、みずからの生活や文化から離陸し、「近代」という異文化を学習する過程に他ならないのである。学校教育はみずからの生活とは切れたところにある。そうだとすれば、かれらの就学率の高さは何を物語っているのだろうか。日本の明治期の欧化教育の状況と似

た面があるかもしれない。

第4に、教育の重点は、まず英語およびサイエンス(数学や科学)、ついでウルドゥー語とアラビア語（コーランを読むイスラム教育）で、これはいずれの学校でも共通していた。(ただし公立学校では異なる可能性が高い)。まさに欧米的近代への道は、学校教育のなかに敷かれているのである。

なおアガ・ハーン校もふくめたフンザの私立学校全体で、現在9人のヨーロッパから派遣された若い男女の教師を雇っていた。かれらには校長の給与（月額3000ルピー）より高額の3750ルピーが支払われているという。ちなみに一般教員の給与は1600～1800ルピー。私立やアガ・ハーン校では小学1年（5歳）から英語教育を設けていることと併せて、「近代教育」にいかに力をそそいでいるかを示す事実である。

第5に、期待されるライフコースはどの学校でも、高等教育を受け、幹部役人（high officer）として故郷に帰ってくることが第一であった。それはアガ・ハーンの強い奨励にもとづくという。アガ・ハーンの意向の浸透力と「近代化」志向の強さを物語っていよう。

第6に、上との関連で当然、強い進学意欲があげられる。いずれも8割前後の高校への進学があると聞いたが、高校の数などからしてその数字には疑問の余地は残る。ただ上級学校進学を可能にするアガ・ハーン財団による奨学金などサポートシステムは相当確立している。それは大学進学まで及んでいる。

第7に、調査のいずれの学校でもアガ・ハーンの肖像写真（とくに先代の第3世）が掲げられていたが、学校内ではイスマイリー派独自の宗教教育は行われていない。アガ・ハーン校でさえ、学校内では政府規定のイスラム教育に限られている。宗派としての独自の宗教教育の場は、村のモスク（寺院）と家庭であるらしい。

5．アガ・ハーンとその財団

すでに明らかなとおり、フンザの教育は、イスマイリーという宗教とそのスピリチュアルリーダーとしてのアガ・ハーンが大きな意味をもっている。宗教的マイノリティが、宗教的サバイバルの戦略として教育を選択し、地域の文明化的発展を賭けている。そのための組織が、アガ・ハーン財団（the Aga Khan

Foundation）である。

アガ・ハーンとは、イスマイリー派の一派のニザール派のさらにホジャ派（もともと西インド地方の商人層に信者が多い）の「イマーム」（預言者直系の子孫であることを根拠にした神聖な最高指導者、精神的首長）の称号である。イマームとしてのこの称号は、イランの王朝に仕え後に反乱したハサン・アリー・シャーが1818年に贈られたことに始まる（アガ・ハーン１世）。その孫のアガ・ハーン３世（1877～1957）はカリスマ的指導者であった。西欧的教育を受けたかれは、全インド・ムスリム連盟の創設などイスラム統一組織づくりに絶大な指導力を発揮した。英国からのインドの独立にも大きく貢献、1937年にはインド代表として国際連盟議長にも就任した。かれによってイスマイリー派の体制が確立され、宗教共同体としての近代化がめざされた。アガ・ハーン３世は、みずからの後継者に、長男ではなく孫（長男の子ども）を指名した。新時代の最先端の近代的教育を受けた青年（米国ハーバード大学出身）というのがその指名のおもな理由であったという。現イマームのアガ・ハーン４世が、それである。アガ・ハーンは３世以来、世界の信者の住むいずれの地域からも等距離を保つという意図からパリに居住し、そのため現在アガ・ハーン財団本部はパリにおかれている（エインズリー・T・エンブリー、1980。および日本イスラム協会等監修『イスラム事典』、1982）。

イマームとしてのアガ・ハーンの権威は絶対的なもので、その絶対性がイスマイリーという宗教信仰上の共同体成立の精神的紐帯となっている。たとえばパス村では、数年前にアガ・ハーンが来村した記念のメモリアルが村の目立つところに数多く見られた。またフンザの祭の中でもっとも重視されているのが、イスラムに共通したイード（断食明けの祭や犠牲祭）ではなく、アガ・ハーンの誕生日であるという。ラマダーン（断食）もメッカへの巡礼も重視されない。それよりもイマームであるアガ・ハーンへの謁見こそ第一関心事である。フンザのごく普通の住民の口から、アガ・ハーンの命はいかなることでも受け入れると、当たり前のように言うのを何度も耳にした。シーア派のうちのイスマイリー派に属するかれらにとって、アガ・ハーンは第４代正統カリフ（シーア派初代イマーム）の血を引く子孫であると信じられ、したがって不可謬なる「生けるイマーム」として絶対的な崇敬の対象とみなされている（大塚・山内1993、成瀬1994）。ここにイスラム教シーア派の宗教的心性がみてとれるが、他方物心両

面における信者の生活を支える一定のシステムが組織されている。その中心が「アガ・ハーン財団」である。

アガ・ハーン財団の基金は、主に先進国や国内都市部（カラチやラワルピンジー等の大都市）在住のイスマイリー信者の寄付にもとづいている。

一般にイスラム教の基本的教義は「六信五行」の形でまとめられるが、ムスリムが実践すべき５つの義務（「五行」）の第３に、ザカートとよばれる貧者への施し（喜捨）がある。アリアバードでの財団の教育事業の責任者からの聞き取りによれば、イスマイリー派では貧富の別なく毎年収入の10パーセントを財団に寄付しているという。つねに「もちろん強制ではない」とことわりながら、信者はそれを宗教上の義務と意識し、確実に納入されているという。これがこの宗派のザカートである。

アガ・ハーン財団はこのザカートの受入れ団体であるとともに、貧しい辺境地フンザの宗教的同胞への援助活動を推進する組織である。(支援の対象はフンザに限られるものではなく、信者の分布する世界各地に及ぶことはいうまでもない)。その活動のめざす方向は、すでにみた学校教育に明らかなように、「近代化」の一言に要約できよう。この「近代化」の方向は、すでにアガ・ハーン３世によって示されてはいたが、２世代若い４世によってさらに本格化した。とりわけ教育、医療厚生、農業の分野が近代化への戦略として重視されている。そのためにＡＫＥＳ（the Aga Khan Education Services)、ＡＫＨＳ（the Aga Khan Health Services)、ＡＫＲＳＰ(the Aga Khan Rural Support Program)の３つの組織が活動中である。

ところで、現在アガ・ハーン財団を中心に「近代化」路線を推進するこのイスマイリー派の宗教的共同体は、ある種の国家的機能をもっているといえよう。教育、医療厚生、農業（産業）近代化の推進の活動等は、近代国家においては本来は国家がになうべき公共的政策にほかならない。しかもその財源が義務と意識されたすべての人からの「寄付」である以上、それは機能的には税にほかならない。もちろん、対外的主権や司法・立法権、領土といった「近代国家」としての要素をそなえているわけではないが、共同体としての求心的な統合力や帰属意識あるいは住民のアイデンティティの面では、いずれの既存の近代国

家よりも強固でさえある。

フンザでのアガ・ハーン財団の資金と組織はパキスタン政府のそれを明らかに圧倒している。生活上の貧困をいまだ脱していないフンザで、教育近代化の成功は、アガ・ハーン財団事業の輝かしい成果である。いまのところパキスタン政府は、財団と協調的関係にあり、財団の側でも、そのサービスをイスマイリー信者のみに限定したり非信者住民を排除せず、政府との協調体制維持に配慮している。パキスタン政府の国家的関心が辺境地フンザにまで十分に及ばないことが、かえってアガ・ハーン財団の自由な活動を許していると考えられる。中国では、国家的支配の機能が強力なぶんだけ、アガ・ハーン財団のような活動は困難であるにちがいない。

これは、国家と民族的もしくは宗教上のマイノリティとの関係を考える上で示唆的であろう。宗教は多くの場合、制度としての国家の境界を越えて広がる。そうした宗教が一定の強固な共同性を（国家の枠を越えて）ともなう以上、主権国家という近代の国家のシステムを相対化する可能性をはらんでいよう。そしてそれは宗教のみではない。国家の境界をこえて広がる民族についても事情は似ている。その点を逆にいえば、宗教的或いは民族的マイノリティにとって、国家という存在は本来的に抑圧機構そのものという性格をもっているということになる。

6．フンザの将来

フンザで進められている宗教共同体の組織による近代化の戦略は、フンザにいかなる展望を示しているであろうか。高等教育をめざしている現在の子どもたちが中堅世代となる20年後のフンザやゴジャールの姿は、どのように変貌しているであろうか。

はたして彼らはフンザの地に帰郷してくるだろうか。教師・医師・行政官僚などの仕事がある限り一定の人は帰るであろう。またカラコルム・ハイウエーにより中国とのビジネスチャンスはひろがり、その拠点としてのフンザの重要性が高まることも疑いない。外国人への開放政策は、そのめぐまれた自然の景観などにより確実に旅行者を増加させ、登山や観光のガイドなどもふくめて経済的な豊かさは増すに違いない。日本人にも「桃源郷フンザ」として紹介され、

現在でもツアーの企画が少なくない。帰郷する条件は今以上に増加することは確実である。

しかしそれ以上に、都市や国境を越えて活躍する道を選ぶ者も増加してくるように思われる。ただその場合でも、かれらがイスマイリーの宗教的共同意識を変えないかぎり、アガ・ハーン財団のシステムによりつねにフンザの同胞を支え続けるであろう。

とすれば、現段階では、アガ・ハーン財団の近代化の戦略は成果を収めつつあるように見える。アマン校長が典型であったように、われわれが接した教育関係者には、意欲と使命感さらには明るさが感じられた。迷いがなく確信に満ちている。子どもたちからも同様の意欲と明るさを感じとれた。アガ・ハーンというイマームの存在とその財団組織が、かれらの意欲と確信を物心両面でささえている。「桃源郷」というのは、美しい自然の景観のみにもとづくものではないといってよい。フンザの当面の未来はパキスタン本土より明るいように思われる。[3]

ただ、問題は一定の近代化がもたらされた後にあるように思われる。上に見てきたフンザの高度の教育の普及は、一定の経済的蓄積と意識の面での成長さらに中国開放政策による国境に近いフンザの重要度の増加などにより、やがてフンザは無視できない重みをもたずにはいないように思われる。その時パキスタン政府とどのような関係になるか。宗教による立国という特殊事情の中、<宗教的多数派>対<少数派・異端>、あるいは<国家的事業を肩代わりするアガ・ハーン財団>対<現実の国家>の緊張など、多くの微妙な問題を含むにちがいない。

また、フンザの「近代化」つまり消費文明の浸透は宗教の質を変えることはないであろうか。一般に「近代化」(消費文明の浸透や都市化・情報化)の進行は、共同体解体の方向に機能してきたし、また信仰の無力化促進の方向に機能してきた。イスラムとくにイスマイリー派が例外であるとする根拠はあるのだろうか。逆にいえば、宗教的アイデンティティや共同体意識を保持しつつ、いかに近代化が達成されるか。そして既成の近代国家のシステムといかなる関係をとりうるか、まさに近代国家のシステムが揺れ動いている現代において、次の時代の宗教と国家や民族の関係をうらなう「実験」ともみなし得る。

7．スバシ村の夏営地、ジャンブラック

パキスタンのフンザでの調査を終えたのち、クンジェラブ峠（4600㍍）の国境をこえて中国領へはいった。当初はキルギス族のスバシという小さな村での調査を予定していた。スバシというのは、水の源頭という意。目の前にそびえるムスターグアタ峰（7546㍍、「氷の父」という意）の氷河からの伏流水が地表に湧きだしたところに位置している。戸数30戸、人口約240人の、日干れんがの粗末な民家が並ぶ孤立して存在するように見える小村である。耕作不能の不毛にちかい高原地帯のため、農業は行われず、丈の低い草を飼料とする家畜の放牧が主たる生業となっている。ヤク、羊、やぎのほか若干の馬、ロバ、らくだも飼っている。

6月中旬から9月中旬までの3ヵ月間、大半の村人は徒歩で2時間弱のさらに山手のジャンブラック（海抜約3,900㍍）という夏営地に、放牧のために移住していたので、調査地点もそちらに移した。住民のパオに居候をしての調査である。

ジャンブラックとは「生命の水」の意。やはり氷河からの伏流水が地表に出現した、モレーンの谷間の泉のほとりにあった。フンザでもここでも水こそが人の生命線であると実感できる。日干れんがの家3棟、パオが8張の合計11「家族」が強いつながりをもって生活していた。たとえば放牧は数戸分の家畜をまとめて交代で放牧に出、婦人たちの手作業（刺しゅうや糸繰りなど）もいくつかのパオに集って行われていた。なおここでのパオごとの「家族」は、通常は同居している老人が村に残っていたり、親戚の一部が同居していたりで、通常の生活単位としての家族とは必ずしも一致しない。

8．スバシ村の子どもたちの学校教育について

中国の学校教育制度は、小学校は修業年限6年制と5年制が併存しており、また入学年齢も満6歳を基本としながら、7歳入学のところもある。その上に初級中学が3年、ついで2年もしくは3年の高級中学の中等教育機関がある。

スバシ村の学校教育もこの学制にもとづいている。ただ小さなスバシ村の小学校には2学年までの学校施設しかなく、3年生以後はカラクルの小学校に通

わなければならない。同小学校は徒歩通学圏をこえているため、馬か自転車を使うか同地に寄宿するかしなければならない。卒業後初級中学に進学するには、アクトにあるブルンケル公社スバシ大隊の中学に、同地に寄宿して通うことになる。

夏営地に、カラクル小学校の先生が滞在していた。夏のアルバイト（家畜の放牧）のためにきていると言う（教員給与が低い）。以下はその聴き取りからえた同小学校の実情である。

6年制小学校で、使用言語はキルギス語。児童数175人、教師数8人に校長、用務職員が3人。1年生が2学級ある他は1学級編成である。カリキュラムは中国の中央政府による規定と基本的に変るところはない。つまり北京のそれと変らないわけである。ただ漢族の国語（漢語）に代えてキルギス語を教える「語文」があり、「外国語」に代えて「漢語」がおかれることの違いであるが、それ自体、中央政府が決めた少数民族居住区への措置にほかならない。教科書も中央の教科書のキルギス語翻訳版である。

教育内容が中国全土画一的であるということは、学校においては当該民族や宗教に固有の教育は行われていないことを意味している。事実まったく行われていないという。したがって、フンザと同様、学校教育を受けるということは、自らの民族の文化や生活とは異質の文化的コードを学習することを意味する。義務教育とはそれを強制する制度にほかならず、それが国家の名において正当化されている。北京とは距離的にはもちろん、宗教（イスラム教）も民族も文化も生活もまったく隔絶したこの辺境地の子どもたちに対して、中国政府は唯ひとつの「国民」教育を貫徹しているわけである。義務教育が近代国家の採る国民統合の最重要の手段であるかぎり、中国という多民族国家においてもこの教育という手段を手放すことはないわけである。

カラクル小学校の教育水準はたいへん低いという。教育の目標は3R'Sができればそれでよい、とその先生は言う。上級学校への進学をほとんど念頭においていないためである。キルギス族は文化と教育の水準が低く、ここでの中学校への進学率はほぼ5％程度にすぎないという。大学への進学者は少なくとも1980年以来（つまり同先生の就任以来）ひとりもいない。それは経済上の問題よりも、劣悪な教育環境による子どもの低学力によるという。

こうした低調な教育の問題は、実はさらに中国社会にねざすより根本的な問

題とかかわっていると、同先生は認識している。仮に高等教育を終えたとしても、キルギス族であるかぎり社会的成功はむつかしいという。たしかにわれわれの見聞でも、中国には漢族を頂点にした民族による階層的秩序が存在しており、社会の要職のほとんどは漢族がしめるシステムができあがっている。キルギス族はその秩序の底辺に位置している。だからキルギス族である限り、ひとたびは教育による社会上昇の夢をみたとしても、結局最後は帰郷して放牧につくことが一般的だという。とすれば、辺境地少数民族にまでもれなく徹底させている中国の「国民」教育は、少数民族にとっては、決して社会的上昇の階梯につながるものではないことになる。

とはいえ、義務教育就学率は現在では相当高いようである。学齢児童の通学を当然視する共通認識は成立している。スバシ村住民のうちにも、大都市カシュガルの親戚に子どもをあずけて都市部の学校に通わせている家庭もあった。たとえ少数民族を疎外する現実があろうとも、社会的上昇への“幻想”をかきたてるだけの魅力が学校にはあるようだ。子どもの可能性に賭ける熱い親の思いがそれをささえているのであろう。

9．えがかれているライフコース

ジャンブラックのすべての「家族」を戸別訪問して得た聴き取りの調査をもとに、かれらの描くライフコースや子どもの教育についての考え方を整理した。

まず零細な放牧に生きる自らの現状を積極的に肯定している住民は、ほとんどいなかった。「昔に較べたらなんでもある。食うに困るわけではないから現状に満足している」という60歳を越えた老婦人の唯一の例外を除けば、すべての者ができればここから脱したいと洩らしていた。都市から隔絶したこの高所辺境地の生活はたしかに苛酷である。真夏でさえ朝に氷結が見られた。冬は雪と氷におおわれ、人の往来は絶えるにちがいない。広大に見える放牧地も自由に利用できるわけではなく、人民公社による割り当制である。飼料の草も堅くて短かく、まばらで量も少ない。牧草の量が権力的に制約されている以上、放牧できる家畜数の上限も限られてくる。放牧による住民の富の増大は制度上困難なシステムになっているのである。

では、かれらはそこからの脱出の可能性をいかなる形で考えているのか。お

おむね以下の様なタイプに分類できるように思われる。

（1）キルギス族の伝統的生活意識を堅実に守りつつ、脱出の期待を子どもに託そうとしているタイプがある。このタイプの人はおおむね勤勉で誠実であった。子どもにたいしては能力の可能な限り高等教育まで受けさせ、社会的成功を期待している。

（2）生業（放牧）にあまり身を入れず、外来者との小ビジネスによってひとやまもうけることをうかがうタイプ。中巴公路の外国人への開放以後、ムスターグアタやコングール山（7719㍍）などの名峰がそびえるこのパミール山岳地帯には外来の登山者やトレッカーの入域がさかんになった。また近くの美しいカラクル湖が政策的に観光地化され、観光客が急増している。こうした外来者に接近し、小両替やみやげもの（婦人たちの手になる民族的手工芸品など）販売等の安直なビジネスによって現金を得ようとする者たちがこのタイプである。かれらはキルギス族の質素で伝統的な生活様式や秩序を乱しつつあるかに見える。生業に身をいれず小ビジネスに走る息子の生きかたをめぐって、老父とうまくいっていない家族を、偶然垣間見る機会があった。

（3）放牧という生業を捨て、都市へ流れて行くタイプ。大都市カシュガル（人口25万余り、車で半日の距離）に肉親や親戚がでていったという家族もいた。しかしおそらく都市での成功者は少なく、大半が都市底辺層を形成しているにちがいあるまい。

なおスバシは美麗なムスターグアタの登山基地に位置し、近年登山者が顕著に増加しているにもかかわらず、フンザと異なり、登山ガイドなどの職業化は見られないようだ。中国では外来者と接触するガイド等の職業は、いっさいを政府が管轄し民間の自由に任すことはないことのためであろう。

10. パミールの南北～フンザとスバシ村の比較～

以上、パミール高原（中パ国境）をはさんで南北に位置するふたつの地点、フンザとスバシで調査を行った。ここでは両地点の簡単な比較をこころみ、それを通じてうかびあがってくるいくつかの問題点を整理して、まとめとしたい。

はじめに述べたように両地点のおかれた状況には多くの共通点があった。それにもかかわらず、両者の現在の意識とスタンスは対照的な様相を見せていた。

フンザは、なによりもまず、生き残りをかけた明確な展望と戦略をもっている。決して閉塞的ではない。宗教的共同意識にもとづき、教育を有力な手段とした「近代化」文明化の方向が浸透している。一方スバシのキルギス族は、民族的にも宗教的にも求心力を欠き、危機意識の共有があるようにはみえない。一様に自らの現状を否定的にみていながら、そこからの出口がみえていないように思われる。フンザと違い、教育も出口としての機能をはたしていない。少なくとも一定の方向性の共有は感じられない。したがって近年の外からの契機による社会的変貌に対しても、受動的で、皮相な（末端的）対応しかできていない。その結果、外部的勢力（政府や都市消費経済勢力）に対して主導権をもちえず、逆にかれらに使用される底辺労働者を形成しているにすぎない。このままでは、スバシ村等の中国領のキルギス族（あるいは辺境地少数民族）は、じり貧的に衰微して行くにちがいない。

では、ここでのキルギス族はなぜ主体的になれないのだろうか。

ひとつには、歴史的につねに遊牧生活を営んできた民族性の問題があるかもしれない。国家とりわけ近代国家は定住する国民を前提に成り立っている。遊牧というキルギス族の生活形態は、もともと国家のシステムとは相いれない性格をもつ。その意味からも決定的な要因としては、中国という強大な国家権力の規制力を考えないわけにはいかない。辺境地のキルギス族は、中央政府からみればほとんど関心をもたれない小さな存在かもしれない。しかし、それは管理や支配を放棄していることを意味するものでは決してない。例えば牧草地さえ自らの自由でなく、人民公社による割り当てであった。外国人のトレックガイドや観光事業も国家組織が独占し、かれらのすぐ身近に進行しているビジネスチャンスをかれらが独自に生かす活動は許されていない。しかもその国家組織のいわゆる“幹部”を漢族が独占する官僚のシステムが、ほとんど全領域にゆきわたっている。くわえて特権的民族たる漢族が、みずからの特権を徹底的に再生産するシステムも備えている。ちなみにカシュガルでようやく許可されて小学校を訪問したが、その小学校ははからずも漢族中心の「幹部」子弟が優先的に入学する「重点学校」であった。パラボラアンテナ２基を備えた充実した施設と優秀な教員が配置された、見るからに特権的な学校であった。５パーセントの少数民族を入学させていると校長は説明したが、すくなくともキルギス族が在学する形跡はなかった。少数民族にとって、教育は自己解放の手段で

あるよりも、国家的統合のための手段として機能している。

要するに「見捨てられた」辺境地のキルギス族も、強力な中国の官僚支配下にしっかりと組込まれているのである。

それに比べ、パキスタン政府は国家的機能が十分にフンザ地方まで及んでいない。少なくとも中国にみられるような官僚支配や国家的規制力は強力ではなく、むしろ自由に放置されているというに近い。

11. 国家と宗教と民族と—むすびにかえて

中国のキルギス族は、中国という国家機構のもとで抑圧されていることを述べてきたが、かれらには、出口をもとめる動きはないのであろうか。

ジャンブラックで調査中、偶然訪れていた青年アホン（アホンとはイスラム教の宗教指導者）に出会った。かれはスバシ村の出身で、24歳。アクトの中学（10学年）卒業後、パキスタンとの国境に近いピラリという小さな町で宗教家に師事してイスラム学を学び、ウルムチのイスラム大学を1993年5月に卒業。帰郷して宗教的指導者として活動開始したばかりであった。かれの当面の目標はキルギス族の宗教専門学校を設立することだという。そしてそれを拠点にした宗教活動を通じて、キルギス族の生活の近代化をめざしたいという。国家機構の強力なこの中国のなかでかれの夢の実現がどこまで可能であるか、それは未知数というほかない。しかし宗教と民族の意識を自覚的にもった青年に実際に出会えたことは、出口を模索する動きがキルギスという少数民族の内部にもあることが確認できたという意味で、幸いであった。

結局フンザにおいてもスバシにおいても、少数民族が国家という枠組みを相対化する契機は宗教にあった。ところで、「近代国家」や「国民国家」という近代以後の世界の秩序を形成してきたシステムが、いまあらためて問われている。それが、民族や宗教の問題を問うことと実は一体の問題であること、この点は以上の論述から明らかであろう。これまで日本は、この民族と宗教の問題にはおおむね鈍感であった。しかしいまやボーダーレスの時代といわれる。フンザやスバシのかかえる問題は、まさに現代のいずれの世界においても問いかけられている普遍的な問題にほかならない。当然われわれにとってもけっして他所事ではない。今回の調査は、こうした問題をわれわれにつきつけてきたのであ

る。

注

1　かつて法顕、宋雲、玄奘、マルコ・ポーロ、そして近くは大谷探検隊などが、このパミール越えのルートを通った。

2　グルミット村：　約250戸、人口2000人以上。ゴジャール地区最大の村で、もっとも南に位置する。村には、私立小学校、私立ミドルスクール（女子のみ）、アガ・ハーン学校（ミドルスクール、共学、英語学校）、公立の高校（government high school、生徒数335人）の、合計4校がある。

グルキン村：　フンザ川沿いのカラコルム・ハイウエーから丘をひとつ越えた谷あいにある戸数105戸、約800人の明るい雰囲気の村。公立小学校（男子）、私立英語学校（共学、ミドルスクール）、アガ・ハーン学校（女子、ミドルスクール）の3校がある。

パス村：　国境に近いゴジャール最北部の、山岳登山やトレッキングの基地の村。75戸、660人。アガ・ハーン学校が2校と私立英語学校（タジク　モデル　スクール）の合計3つの学校がある。

3　ただしかれらの生活水準はまだ低く、子どもたちの栄養状態も決して良好とはいえない。とりわけ目の病気が目立った。改善すべきこまかい現実的な問題はまだまだ山積しているように見える。

文献

アンヌ・フィリップ、吉田花子・朝倉剛訳『シルクロード・キャラバン』1988、晶文社
エインズリー・T・エンブリー「アガ・ハーン3世」、桑原武夫編集代表『世界伝記大事典』1980、ほるぷ出版
高知医科大学フィールド医学研究会　編『長寿伝説の里』1992、高知新聞社
小西正捷編『もっと知りたいパキスタン』1987、弘文堂
渋谷英章「パキスタンの教育」、『現代学校教育大事典』1993、ぎょうせい
月原敏博「フンザ、ゴジャールの文化地理ノート」、『ヒマラヤ学誌』第4号、1993
寺谷頼之「子供のしつけと教育」、『もっと知りたいパキスタン』1987、弘文堂
成瀬哲生「漢語文献に見えるイスマイーリー派への言及」、『ヒマラヤ学誌』第5号1994
日本イスラム協会ほか監修『イスラム事典』1982、平凡社
前嶋信次・加藤九祚　編『シルクロード事典』1993、芙蓉書房
松沢哲郎・高木真一「解禁後のフンザに入る」、『岩と雪』第34号、1973
松林公蔵ほか「京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画1991第5次隊（フンザ・カラコルム）報告」、『ヒマラヤ学誌』第3号、1992
山内昌之・大塚和夫　編『イスラームを学ぶ人のために』1993、世界思想社

【付記】

本稿は、先に公表した調査報告論文「フンザの教育事情と子どもたち」および「中国領パミールのキルギス族の教育事情－フンザとの比較から」（いずれも京都大学ヒマラヤ研究会『ヒマラヤ学誌』第5号、1994年、に掲載）と重複するところがあるので、この点ことわっておく。